

宮城教育大学との連携による

東北教育復興支援活動報告書

第3巻

国立大学法人 奈良教育大学
次世代教員養成センター

2017年3月

ご挨拶

「東北教育復興支援活動報告（第3巻）」の発刊に寄せて

奈良教育大学次世代教員養成センター長 岩本 廣美

2011年3月11日に東日本大震災が発生してから6年が経過しました。奈良教育大学は、震災発生後ただちに地域での募金活動等に取り組むとともに、教育復興支援に向けて協議を開始し、2011年7月には、事前研修等の準備を経て被災地への学生の第一次派遣を実施しました。以来、2017年2月の第十八次派遣まで、宮城教育大学の教育復興支援センター、現在は防災教育未来づくり総合研究センターと連携しながら、教育復興支援活動に取り組むボランティア学生を派遣してきました。毎回数名の学生が参加し、これまでの参加学生総数はのべ111名になります。奈良教育大学のような小規模な大学が、しかも被災地から直線距離で1,000km近く離れたところから、被災地への学生派遣を継続してきたことは、全国的に見てもまことに稀有なことであります。

派遣された学生は、教育復興支援活動に取り組む中で多くのことを学んできました。また、学生派遣や現地での活動に関わって、背後では多くの関係者がさまざまな形で学生をバックアップしてきました。そうした経過や学生が学んだ内容は、これまで2回発行した報告書にまとめてきました。2013年3月発行の第1巻では、第一次から第七次までの派遣について、2015年3月発行の第2巻では、第八次から第十三次までの派遣について、それぞれ報告してきました。今回の第3巻では、2015年8月の十四次（丸森町）2015年8~9月の第十五次（南三陸町）、2016年2月の第十六次（陸前高田市）、2016年8月の第十七次（気仙沼市）、2017年2月の第十八次（気仙沼市）の5回について、派遣の経過や学生が学んだ内容等について報告しています。それぞれのページには、参加した学生の思いが凝縮されています。是非ともご一読いただければと思います。

今回の報告書で特筆されることのひとつは、被災当時、宮城県南三陸町立戸倉小学校の校長だった麻生川先生からご提供いただいた記録文を掲載できた点です。大地震発生時の状況や避難の経過、その後の避難先での状況などが、学校で児童を預かる責任者としての立場から克明に記録されており、読む者は強く心を動かされるとともに、多くのことを考えさせられます。教育関係者にとどまらず、社会で広く共有されてよい内容を含んでいます。

もうひとつ特筆されるのは、第十二次（丸森町）と第十三次（南三陸町）の派遣に、学生として参加し、現在は教壇に立つ卒業生の小池さんから所感を寄せていただいた点です。学校教員としての立場から、派遣で学んだことの意義を具体的に述べていただいています。第一次以来これまで派遣され、卒業した学生の大半は学校教員になっていますので、学生のときの経験が、その後の取り組みの中で大きな財産になっていることを読み取っていただければと思います。

（2017年3月20日記）

目 次

＊ ご挨拶

＊ 実施概要と活動のまとめ

＊ 参加学生報告書

～被災地で考えたこと～

＊ 防災フィールドワーク

～南三陸町立戸倉小学校の避難について～

＊ 現地視察

～気仙沼市大島の防災フィールドワークに同行して

＊ 東北の地で学んだこと

～教員になった今、思うこと～

＊ 東北教育復興支援活動参加後の学生の取り組み

～地域と共に減災教育を考えるプロジェクトへの展開～

実施概要と活動のまとめ

*2015 年 3 月実施の第 14 次から 2017 年 2 月実施の第 18 次までを記載しております。

それ以前の活動につきましては東北教育復興支援活動報告書第 1 巻・第 2 巻をご参照ください。

*また、事前研修・事後指導に就きましては、従前通り現在も実施しております。その詳細に就きましては第 2 巻をご参照ください。

*第 16 次派遣に就きましては、陸前高田市教育委員会との協定締結を踏まえて、一般社団法人「子どもエンパワメントいわて」との連携により、実施したものです。

第14次派遣 丸森町立丸森中学校 地域連携による自学自習支援

＊期間 2015年8月3日（月）～8月8日（土）

＊事前研修 2015年7月31日（金）17：00～20：00

＊参加学生 2名（（男1名 女1名）

4回生（幼年教育）

3回生（社会科教育）

＊日程詳細

8月3日（月） 08：53 京都駅出発（新幹線）

19：00 丸森町着

8月4日（火） 教育長講話、沿岸部被災地視察研修
宮城教育大と合流・ミーティング

8月5日（水） 丸森中学校学習支援

8月6日（木） //

8月7日（金） //

14：00 活動終了後丸森町出発

19：30 仙台出発（夜行バス）

8月8日（月） 06：16 京都駅八条口到着



活動報告

* 宮城教育大学による事前研修の一環として、沿岸地域の被害地見学に行きました。最初に閑上中学校に訪れました。この中学校は近々取り壊されてしまう、とのことでした。

その校庭に、この津波で亡くなった中学生の子どもの名前を刻んだ碑がありました。よく考えてみれば私の1, 2年年下だけに、亡くなった生徒が生きていたら大学1〜2回生になっていただろうという事実に気づいたとき、何とも言えない気持ちになった。もしかしたら大学の一人の後輩として、また、別のどこかでこれから関わりがあるかも知れなかったかもしれない、と親身になって考えていくと被災に対する深い悲しみのような思いを抱き、とても心に迫るものがありました。

もうひとつの学校では、学校が海岸近くに位置していたということで、津波が来たときの水位や、倒れた時計塔などの傷跡がなまなましく残っていました。この中学校の生徒は避難の際、マニュアルでは付近の山に登るようになっていましたが、現場の教員の「避難している時間が無い」との判断で、校舎の屋上に避難したそうです。幸いにも津波は屋上まであと数十センチというところで止まったそうで、生徒は無事だったそうですが、マニュアル通りにしていたらどうなったかわからないという話を聞きました。この話を聞いて、後期の授業では防災教育の授業を受けることにしました。

* 英語の長文が苦手といていた男子中学生に「一緒に日本語訳にしてみよう」と「一緒に」確認しながら進めることで、「長文＝難しい」のでは無く、「自分で理解できる文である」ということを知ることが出来た様子だった。その時、いかに苦手意識を取り除いていくかが重要であると知った。

これは他の教科でも応用できるものであると考えられるため、もっと早く気付いていれば良かったと思う。課題も出たけれど濃い一日一日を過ごせたボランティアだったと思う。

* 活動中に2回地震がありました。震度2〜3程度の余震でしたが、奈良から来た私たちにはとても大きな揺れに感じました。宮城教育大の学生が「そんなに大きな揺れでないから大丈夫。」と落ち着いた声かけをしてくれました。そのおかげで私たちは少し落ち着きましたが、その学生は「こうやって地震が頻繁に起こると慣れてしまう。でも、慣れで侮ると怖いことになる」と言っていたのを聞いて、恐怖との戦いがまだまだあることを痛感した。

* 震災を「他人事」にしないためにはどうしていけば良いのかということを課題として模索しながら教育者として出来る事をしていきたいと思う。

第 15 次派遣 南三陸町立志津川中学校 授業補助・部活指導

＊期間 2015 年 8 月 30 日(日)～9 月 5 日(土)

＊事前研修 2015 年 7 月 31 日(金)17：00～20：00

＊参加学生 5 名（男 3 名 女 2 名）（希望者 10 名）

4 回生 1 名 家庭科教育

3 回生 1 名 心理学

2 回生 1 名 数学教育

1 回生 2 名 数学教育

＊日程詳細

8 月 30 日(日) 21：43 京都駅出発（夜行バス）

8 月 31 日(月) 08：30 仙台到着

13：00 宮城教育大学と合流

被災地見学後、南三陸町到着

9 月 1 日(火) 09：00～17：00 志津川中学校授業補助

9 月 2 日(水) 〃 〃

9 月 3 日(木) 〃 〃

9 月 4 日(金) 09：00～15：00 〃

15：00 南三陸町出発

19：30 仙台出発（夜行バス）

9 月 5 日(土) 06：16 京都着



活動報告

＊ 被災地がどこまで復興が進んでいるのか、そこに住む人達はどのような生活をしているのか自分の目で見てこようと思い参加しました。

仙台駅に着くと、行方不明者を探す活動をしている人達が居た。4年半経った今でも家族や友人が生きていることを願い、希望を持ち続けて探している人達が居ることを知り、彼らの当時の悲しさや、今も残る悔しさややりきれなさを思うと胸が痛くなった。

南三陸町に着くと津波の被害に遭った場所は一面に土の山が積まれていた。元々そこに何が建っていたのかその状況からは全く分からなかった。コンビニや薬局などは仮設だった。4年半も経っているのに、ここまで復興が進んでいないのかと正直驚いた。

＊ 生徒の心のケアはとても難しいと感じた。きっと震災の影響で悲しみを受けた子や無気力になった子は居るのだが、それを表に出していなかった。4日間という短い間では確かな信頼関係を築くことも難しかったので、4割の生徒が仮設住まいの状況下で、狭い仮設住宅での生活、バス通学のため朝早く出て部活も最後まで参加せずにバスに乗ることなど、震災前の生活と異なり日常生活の変化にストレスを感じる子も居ると思う。しかし、彼らは明るく笑顔で学校生活を送り、運動会では一つになって一生懸命よさこいを踊る姿を見せてくれた。私がパワーをあげたいと思い参加したボランティアだがむしろ私が生徒から元気をもらった。これからも志津川の子どもたちがたくましく生きていけるよう願っている。また、南三陸町で学んだことや感じたことを伝えていこうと思う。

第 16 次派遣

岩手県陸前高田市立第一中学校・米崎小学校 自学自習支援

地域連携学習支援「学びの部屋」子どもエンパワメントいわて

- * 期間 2016 年 2 月 19 日(金)～2 月 26 日(金)
- * 事前研修 2016 年 2 月 17 日(水)13:00～16:00
- * 参加学生 4 名 (男 3 名 女 1 名)
 - 3 回生 3 名 数学教育、保健体育、社会科教育
 - 1 回生 1 名 社会科教育
- * 日程詳細
 - 2 月 19 日(金) 21:43 京都出発 (夜行バス)
 - 2 月 20 日(土) 08:30 仙台着
 - 14:59 陸前高田駅着 (BRT)
 - 2 月 21 日(日) 09:00～17:00 第一中学校・米崎小学校にて中高生の学習支援
 - 18:00～21:00 陸前高田市スクールカウンセラー渡部先生を招いて学習会
 - 2 月 22 日(月) 午前中 地域課題の探求のための聞き取り
 - ・陸前高田市社会福祉協議会安田留美さん (生活相談員)
 - ・農業実践者「たねっこまくべえ会」事務局長佐藤さん午後から被災地に於ける社会的課題探求調査
 - 19:00～21:00 第一中学校学習支援
 - 振り返りミーティング
 - 2 月 23 日(火) 16:00 まで各自課題解決に向けて活動
 - 16:00 「子どものエンパワメントいわて」オリエンテーション
 - 19:00～21:00 第一中学校にて E-patch の活動
 - 2 月 24 日(水) 16:00 まで各自課題解決に向けて活動
 - 16:00 「子どものエンパワメントいわて」ふりかえり
 - 19:00～21:00 第一中学校にて E-patch の活動
 - 2 月 25 日(木) 09:14 陸前矢作出発 (BRT)
 - 気仙沼経由仙台 (BRT)
 - 19:30 仙台出発
 - 2 月 26 日(金) 06:16 京都着

注1 「子どもエンパワメントいわて」愛称 E-patch は震災後すぐに立ち上がった「いわて GINGA=NET」と協働し、陸前高田市教育委員会より地域連携事業の一環として「学びの部屋」（放課後学習支援）を受託して活動しています。

注2 陸前高田市社会福祉協議会は被災直後にボランティアセンターを組織し、ニーズの調査や外部からのボランティア派遣を担ってきた団体です。

注3 たねっこまくべえ会は本学の学生が取り組むひまわりオイルプロジェクトのきっかけとなった団体で震災直後の無気力感からの脱出に大きな意味を持つ活動をした団体です。

活動報告

* スクールカウンセラーの渡部先生の話から、「年数が経つとともに段階的に辛さが変わってきます。震災当初とは違い、形を変えてまた異質の辛さがある」ということです。

子どもたちも今まで押し込めていた気持ちを漸く外に表現できるようになりつつあるといいます。これからも少しでも心の支えになればと思いました。



第 17 次派遣

気仙沼市立気仙沼・唐桑・津谷・階上中学校

地域連携自学自習支援「夏休み学び塾」

＊期間 2016 年 8 月 20 日(土)～8 月 26 日(金)

＊事前研修 2016 年 7 月 22 日(金)17：00～19：00

＊参加学生 4 名（男 4 名）
4 回生（社会科教育、数学教育、英語教育）
1 回生（社会科教育）

＊日程詳細

8 月 20 日(土)	21：43	京都駅八条口発（夜行バス）
8 月 21 日(日)	08：30	仙台着
	09：30	仙台出発
		気仙沼市大島着 防災フィールドワーク
8 月 22 日(月)	08：30	宿舎出発・各活動校へ移動
	09：30	自学自習支援
	15：30	活動終了後宿舎へ移動
		ミーティング
8 月 23 日(火)		各活動校にて自学自習支援
8 月 24 日(水)		〃
	18：30	仙台着
8 月 25 日(木)	19：30	仙台発（夜行バス）
8 月 26 日(金)	06：15	京都駅八条口着



活動報告

* 気仙沼市大島でのフィールドワークで、住民の方々に当時の震災による津波の被害や状況をお伺いすることで、改めて津波の怖さを知りました。こういった話を聞くたびに「この経験を次にどう活かしていくのか」というのが聞き手となった私たちの課題としてあげられます。

被害に遭われた方は「物を準備するにも、限度がある」とよく言われます。物ではなく、地域の連携、明確には避難所となる学校と地域のコミュニケーションを普段からどのように深めていくのかが力のいれどころになる重要な課題だと考えられます。

これは現場に出ても大切なことで、災害だけでなく不審者など様々なものから児童生徒たちを守るために必ず充実させるべきです。もちろん学校関係者の防災意識及び災害時の個々の役割や働きを事前に考慮しておくことも大切です。

その際、当然、学校設備や教員も災害により担当の働きを追考できない可能性も充分にありますので、その点にも配慮が必要だと考えられます。

いずれやってくるであろう様々な災害から、児童生徒や学校、地域を守るための経験を少し積みました。この経験を活かせるようにこれから取り組んでいきたいと思います。



第 18 次派遣 授業中の学習支援及び教員補助

気仙沼市立気仙沼小学校、松岩小学校、鹿折小学校、
小原木小学校、中井小学校、面瀬小学校

＊期間 2017 年 2 月 10 日(金)～2 月 18 日(土)

＊事前研修 年 1 月 26 日 (木) 17 : 00～19 : 00

＊参加学生 6 名 (男 5 名 女 1 名)

教職大学院 1 名

3 回生 2 名 国語教育専修

2 回生 2 名 教育学専修

1 回生 1 名 社会科教育専修

＊日程詳細

2 月 10 日(金) 21 : 43 京都駅出発 (夜行バス)

2 月 11 日(土) 07 : 15 仙台着 被災地見学、仙台泊

2 月 12 日(日) 07 : 15 仙台発 被災地見学の後、気仙沼市大島着
事前研修 大島泊

2 月 13 日(月) 06 : 40 気仙沼市大島発気仙沼市内各小学校へ
～ 08 : 00

～ 授業補助及び教員補助

2 月 16 日(木) 17 : 00

2 月 17 日(金) 08 : 00

～ 授業補助及び教員補助

14 : 00

15 : 00 気仙沼出発

17 : 30 仙台着

19 : 30 仙台発 (夜行バス)

2 月 18 日(土) 06 : 15 京都駅着



活動報告

- * 大川小学校を訪問した。大川小学校では多くの児童、教師が亡くなったが、「山に逃げていれば助かったかも知れない」、「判断が早ければ・・・」などというようなことは後から分かる原因だが、なぜ、もっと早い判断が出来なかったのか、最終的な判断ミスはどうして起こったのかをよく考え、「できる限り、なるべく」では無く「絶対に起こらないようにすること」という言葉が心に残った。
- * 災害に対して、事前から十分に準備することが大切だと感じたが、それ以上に実際に行動することの難しさを感じた。マニュアルを用意するだけでなく、組織として統率のとれた行動をとれるようにして行くことが必要だと考えた。
- * 大川小学校の佐藤さんの講話で、「ひとりひとりの命のストーリーがある。」という言葉が一番心に残っている。数で言えばまとまるが、そこには一人一人に対する気持ちたちが組み込まれておらず、数による「かわいそう」等の声上がる。だが、子どもたち、教師はどんな思いをして亡くなったのかを、今、考えてみれば、すごく貴重な時間であったと感じる。

地震、津波、火事など、自然災害などで命を落とす可能性があることを忘れずに、教育者として、次世代を担う子どもたちに、また、社会に向けて発信し、大川小学校のような悲劇を繰り返さないように尽力をし、語り継いでいきたい。

- * 3時間目に二分の一成人式の練習をしていた。一人一人が自分の夢と、なぜその職業に就きたいのかを発表していた。その中でも「僕は大工さんになりたいです。大工さんになって震災が来ても安全な、丈夫な家を作りたいです。」と発表した児童がいた。小学校4年生で、震災当時は4歳ぐらいだが、しっかりと“震災”が刻み込まれているのだと感じた。二分の一成人式はとても大きな特別活動で、鹿折小学校の志教育と大きく関わっており、地域の特色・歴史を活かした特別活動は子どもたちに大きく影響するのではないかと思った。
- * フィリピンとのダブルの児童がいた。国語に関しては、場面をどこで切るのか全く分かっていないようだった。しかし、どの子よりも発言し、積極的に授業に参加していた。自分の回答に自信を持たない児童が発信して、一歩ずつ成長していく姿に感動した。将来、私が勤める学校はこの小学校のように少人数ではないかも知れないが、個々の成長を大事に指導できるよう心掛けたいと思う。

また、現代は多様な文化をバックボーンに持つ子どもは少なくない。家庭環境も一通りではない。その子どもたちがのびのびと過ごすことが出来る学級・学校を築きたいと思った。

- * 児童は皆、快活で、明るく、素直な子どもたちだった。グラウンドに仮設住宅があったために、少し狭くなっていたにもかかわらず、遊びを工夫していて、大きく身体を動かせる活動を考案していた。

* 私を含め、先生に対して絶対に敬語であることに驚いた。今まで私が経験してきた学校生活では、必ず一人くらいは先生に対してタメ口である子がいたし、先生もそれを注意しないことが多かったからだ。特に私たちは児童と年齢が近いので、タメ口で話されると考えていたので、驚いた。

* 本日は体育の授業補助が多く、身体的疲労を強く感じた。しかし、子どもたちは皆楽しそうで、また、全員が積極的に授業に参加していたので、精神的には非常に満足した一日だった。教頭先生から「熊本地震の報道で辛くなった子どもがいる。」ということを知り、また、他の先生から「児童は当時幼少期であったので、震災の記憶はあるかも知れないが、社会全体で見た被害の大きなスケールでは分からないのではないか。」という意見も聞き、震災が及ぼす影響は、ただ、建物や人物を壊すだけではないと感じた。

「震災＝物を破壊し、それに伴って人々も壊していくもの」という捉え方では震災及びその被害に対しての理解は不十分であり、震災というものをもう一度深く考えて、捉え直す必要があること、また、その概念と共に、この数十年の間に大地震が起きていない地域で行われている防災訓練についても見直されるべきだと感じた。

* 振り返りの時に言語化することの重要性が話題になった。経験や出来事、あるいはその感想を話したり、文章化する事が苦手なので、このボランティア活動で少しでも身につけたいと思う。

また、フィールドワークのように積極的に他人の話を聞くこと、また、聞くだけでなく積極的に相手に質問し、時には自分の意見を述べてみることも対話という観点から言えば、重要なことだと言うことに気づかされた。



牡蠣養殖場見学



学習支援



学習支援



振り返りミーティング

参加学生報告書

～被災地で考えたこと～

東北教育復興支援に参加した学生は多くの学びを得て帰ってきました。その感想文です。

東北教育復興支援に参加して考えたこと

数学教育専修

森 将吾

この一週間で私はたくさんのことを学びました。実際に行く前までは、学習支援をして子どもたちのために精一杯頑張ろうと思っていました。しかし、実際行ってみると、生徒との距離は短期間では縮める事が出来ず、コミュニケーションをうまくとることが出来ませんでした。それだけでなく、自分たちはいてもいなくても関係なかったのでは、ということもありました。しかし、それ以上に得たものは大きかったです。

また、自分たちボランティアを余り歓迎しない先生方もおられ、少し複雑な気持ちになりました。もちろん、仕事を与えてくれる先生や、授業に私たちを混ぜてくれる先生もいました。一方で、「私の授業では何もしないで欲しい。後ろで見ているだけにして。」とおっしゃる先生もいました。参加するまでは、総ての先生は私たちを必要としていると考えていました。そのあたりのギャップに私は驚きました。

新聞や情報番組では、「復興」と言われています。しかし、実際に自分の目で確かめてみると、「まだまだ、復興できていない。」と私は感じました。まだまだ、海の近くは土の山ばかりでした。防災庁舎を見たときの衝撃は今でも覚えています。

また、生徒とうまくいかないことや、生徒にはどれくらい指導したらいいのか、先生とのやりとりのことなど、ボランティアのメンバーとのミーティングはとても意味あるものとなりました。長いミーティングでは3時間に及ぶ日もありました。今、考えると、私たちのように考え込み、つまづいたように、政府も話し合い、考え、つまづいた事で、復興も遅れてしまっているのではないのでしょうか。一様に復興が遅れているのは政府の責任だ、というのはおかしいと私も考え直しました。

ミーティングでは自分たちのすべきことは何なのか、この短期間で何が出来るかと、皆で考えました。最初は私たちは生徒に勉強を教えることが第一目的だと考えていました。しかし、短期間では生徒との壁をなくすことは難しく、コミュニケーションを取ることさえも難しい状態でした。そこで私たちは「生徒に外の世界を教えること、大学ではこんなことを学ぶことが出来る、未来のビジョンを見せる事に重きを置くべき。」だと考えました。もちろん、勉強を教えることにも重きを置きました。

私はまだ、教育実習に行ったことがなく、実際に、中学校に教師側の立場で入るのは初めてでした。生徒はとてもかわいく、愛らしく、やはり私は教師になりたいと再確認できました。1回生で実際に教育現場に赴くことが出来たのは、私にとって良い経験となりました。私は朝の会や、給食の時間、掃除の時間、帰りの会は1年生の教室で過ごさせてもらいました。しかし、最後までしっかりと会話できた生徒は数人で、大半の生徒は話しかけても、返事だけや、話しかけて欲しくない態度でした。正直自分の無力さを痛感しました。

他のメンバーのクラスの状況も共有しました。やはり1年生のクラスでは、生徒とうまくコミュニケーションがとる事が出来ない状況でした。しかし、2年生になると、うまく会話が出来る状況で、3年生になると、仲良くなりすぎて、敬語がなくなったり、他の問題が生じるくらいコミュニケーションはとれるという状況でした。

ミーティングでは「教育とは何なのか」、「勉強とは何なのか」、「支援とは何なのか」といった一部飛躍した話し合いまでしました。私は特に「なぜ勉強するのか」についての話し合いが印象に残っています。一人は「自分の選択肢を増やすため」、一人は「自分に自信をつけるため」、一人は「生きるのに必要だから」と、どれも大切で私の考えにはなかった視点もあり、勉強になりました。

「支援とは何なのか」についても「震災という言葉がよぎるが、震災という言葉を取り払う支援が大切ではないのか」、「震災なども大切だが、学習支援に重きを置くべき。まだまだ、多くの生徒が仮設住宅に住んでいる。自分の部屋などなく、勉強できる環境にない。これらも考えるべき。」など、たくさんの考えがあり、他人の意見も尊重する大切さを実感しました。

また、ミーティングでは「なぜ、この活動に参加したのか。」についても話し合いました。「実際に自分の目で確かめたいから」、「参加理由は漠然としている。」、「震災で自分の家が流された。これまでの恩返しがしたいから。」、「教師になる上で、きちんとした情報を知るべきだから。」と、メンバーそれぞれ理由は違い、考え方も違いました。しかし自分の意見も主張でき、指摘し合い、他人の意見も受け入れることが出来、ここまで教育について熱く語れるこのメンバーの一員になれたことを誇りに思います。

今回の経験では、人間として一回り大きくなり、教員となる上で大きく成長しました。一週間を経て、私が得たものは大きかったです。しかし、生徒に何か与えることが私たちの目的であったのではないかと、自分の無力さを感じます。また、来る前と思っていたことが変わりました。支援ボランティアは「学習支援」だと考えていたが、それだけではありませんでした。震災について風化してしまう事が一番駄目なことだと思います。私たちも行って終わりではありません。私はこの経験を奈良教育大学で共有し、少しでも多くのかたに震災について考えるきっかけを与えたい。また、この活動は続けるべきだと思います。是非この活動を続け、同じような体験を他の学生にも経験してもらいたい。

東北教育復興支援 第16次 振り返り

数学教育専修 上田 悠右

2011年3月11日に起きた東日本大震災後、今回、私は、初めて被災地に来ることになりました。来る前から、以前より持ち合わせた自分の見識から、復興のことについて東北の人たちが、こちらで考えるだろうと思っていましたが、実際、こちらの現地の方の生話～メディアやネットでは分からない～息づいた話を聴いて、そこから考えを巡らせるに至りました。このことについてはやはり、「現地に行って、見て、触れてみないと感じ取ることとは出来なかったなあ」と思います。話を聞いている内に感じたことは、現地の方は「被災地としてまだまだ忘れて欲しくない」と思っているようであるということです。震災から5年の期間が経ち、県内外の行政機関では、いくつかの事業の予算を打ち切りしだしているようです。しかし、実際はこちらの工事現場を目で見ると、全く復興が始まったばかりのような状況です。それにつけて、外部からの支援・ボランティアがあつてこそ、被災した方々の生活、精神面の支えになっているようです。また、震災から1年、2年、・・・5年と経ちますが、段階的に辛さが変わってきます。かつて復興に対し、辛さがあつたようですが、今では、生活面に形を変えて、また異質の辛さがあるということです。また、今なお、募金活動の広告を見るので震災のことを忘れたことはありませんが、それでも震災が起きた当初より、関心度は低くなってきています。しかし、実際の被災地ではまだまだ復興途上であるので、このことは周りに伝えたいと感じる思いです。

学習支援に関して、震災があつたからというのも一つですが、田舎特有の「大学生の年頃の若者が少ない」ということもあり、私たちは、ただ、勉強を教えるだけでなく、子どもたちにとって、「お兄ちゃん、お姉ちゃん」的存在として、大学生としての自分たちの魅力を伝えられたらと思っています。それというのも、子どもたちは、初めから人なつっこく接してくれて、お互いに緊張することなく、打ち解け合えたということも、そう感じた理由の一つです。「新たなゆめを届けてあげられた。」こう考えると、私自身「行って良かった。」と感じます。

奇跡の一本松に関しては、強さ、希望を象徴しています。しかし、実際、そこのあるのは一本松（モニュメントであり、枯死している）だけで、沿岸部の半径数キロは、嵩上げ地区として、トラックやトレーラー、積み上げられた土のみが広がる非常に人工的で色のない世界が広がっており、虚無的な冷たさのみを感じました。象徴とされながらも一本松は取り残された感じで、寂しそうでした。

東北教育支援ボランティア

数学教育専修 操田 宙志

8月の20～26日まで東北の教育支援のボランティア活動に参加した。20日の夜行バスに乗って東北のほうまで行く予定だったが、教員採用試験の日程と重なってしまったため、私だけ急きょ、飛行機などを手配し、個別で東北に向かうことになった。初日は気仙沼市の大島で宿泊したが、いざ行くまでは気仙沼市が仙台からそう離れていないのではないかと考えた認識しか持っておらず、また普段は大阪や奈良といった比較的交通機関が充実している所に住んでいたこともあり、自分でどの飛行機、どの電車で向かうと決め、実際にどこら辺を通って行ったかということをしつかり調べることが出来たのでとても勉強になった。初日の大島はフェリーで入った。そのフェリーの会社の社長の話を聞くというプログラムであったが、私が特に印象に残っていることは、「何をするにもまず一番初めに始めなければならない」という言葉である。」大島では毎年マラソン大会を行っており、復興の途中であったが、マラソン大会を行うと掲げたところ、メディアに注目され、走りやすいようにと道路の舗装を行ってもらったというエピソードを聞いて、やはり初めに何かをすることは復興を進めていく上で大切にしなければならないと思った。8月の22日～3日間唐桑中学校で学習の補助という形で実際に生徒が勉強している所を見て回り、困っている生徒に指導をした。学校まではタクシーで送迎していただいたが、まだ復興しきれていないところも多くスーパーが一つもなく何かほしいものがあつた時にはコンビニに足を運ばなければならない状況であった。また2020年に東京オリンピックが開催されるということでただでさえ足りてない人材が東京の方に流れてしまうのは複雑な気分であるという話をボランティア先の先生から聞き、東京オリンピックもよいところばかりではないと思った。実際に唐桑中学校で午前中は中学生、午後は小学生と学習支援を行って来て思ったのが、「教育はどこでも等しく必要である」ということである。私は塾や教育実習等を通して児童生徒と触れ合ってきたが、大阪だから、奈良だから、東北だからと言って何も特別なことはなく、また人が生きていく上で教育は必要不可欠であると、改めて思いました。子どもがいる限り、教員というのは必ず必要であり、将来子どもたちに勉強だけでなく例えば今回のボランティア活動を通して東北の人の温かさや、まだ復興が全然できていないところもある(岩手県の方)ということも伝えることが出来る教員になりたいと改めて感じ取ることが出来る非常に有意義な活動であったと思う。

今回、宮城教育大の千田先生や、フェリーに間に合うように送ってくださった菅原先生、日程がずれてもボランティアに参加させていただいた小島先生やボランティア先の仲間などにとっても感謝し、これからに是非つなげていきたい。

第 17 次東北教育復興支援について

社会科教育専修 市岡 宏基

今回のボランティアでは、気仙沼市大島でのフィールドワークを始め、僕自身は気仙沼中学校での 3 日間の教育補助を行わせていただきました。

大島では、大島の優美な自然を感じるとともに、フィールドワークにおいて、現地の住民の方々に当時の震災による津波の被害や状況をお伺いすることで、改めて津波の危うさを実感しました。内陸県にしか居住の経験がない私にとって、地震という経験はあっても、津波という災害は、未体験のものです。なので、このような経験談を聞くことは、何回目であっても、目新しいものであるように感じます。また、こういったお話を聞いた際に、「この経験を次にどう生かしていくのか」というのが、聞き手となった私たちの課題としてあげられるわけですが、被害にあわれた方々は「物を準備するにも、限度がある」とよく言われます。なので、物ではなく、地域の連携、明確には、避難所となる学校と地域のコミュニケーションを、普段からどのように深めていくのか、が力の入れどころになる重要な課題として考えうると思われまふ。これは、現場に出ても大切なことで、災害だけでなく、不審者など、様々なものから、児童、生徒たちを守るために必ず充実させるべき問題です。もちろん、学校関係者の防災意識および、災害時の個々の役割や働きを事前に考慮しておくことも大切です。その際、当然学校教員が災害により、担当の働きを遂行できない可能性も十分にありますので、その点にも配慮が必要でしょう。

3 日間の教育補助では、気仙沼中学校にて、震災による子供たちの学習場所の提供を目的とした活動を引き継いで行っているようでした。元気いっぱい小学生から、受験を控える中学生まで、さまざまな子供たちと接しながら、「教える」という行為の難しさや、ただ教えるのではなく、「先生」という立場から子供たちにどのようにアプローチしていくのか、彼らへの接し方について、今回は特に考えさせられました。確かに、教育に関する、ボランティアとして参加させてもらっている以上、「少し年上のお兄ちゃん」という名目でもありつつ、教育者のはしくれという立場も十分に考慮し、それを行動にうつすことが大切です。

また、今回の過程において、「被災地」というワードを想起させることは、児童からは一切見聞きしませんでした。港や大島の海岸付近などには、まだ多くの、被害にあった家のコンクリートなどが残っていました。また、プレハブの飲食店などもあって、なかなか元通りにならない難しさがまだまだ残っていました。僕らには、あくまでこの現状を手助けするような力はありませんが、いつれやってくるであろうさまざまな災害から、児童生徒や学校、地域を守るための経験を少し積みました。この経験を生かせるように、これから取り組んでいきたいです。

東北ボランティア活動振り返りレポート

国語教育専修 吉岡史朗

○被災地を見学して

2月12日に大川小学校、戸倉中学校、向洋高校を訪れた。

大川小学校では、2人の方が語り部として参加して下さった。父親が当時大川小学校の2年生担任であり、津波でその父親を亡くしたササキ君、当時大川小学校6年生だった娘を津波で亡くしたサトウ先生である。主要な説明などはサトウ先生が行ってくれた。サトウ先生は大川小学校の立ち入り禁止区域まで入らせてくれた。私は報道や大学の講義でしか大川小学校の情報をもっていなかったので、自分の目で現場を見て非常に衝撃を受けた。津波がどれだけ強大な力をもって押し寄せてくるのか、安全で強固に作られているはずの学校が無残にも崩れてしまっているのを見ると声が出てこなかった。震災が起きる直前まで、目の前の教室には明るい学級が存在していたのだと伝えられても想像ができないほど校舎が崩れてしまっていた。

大川小学校で報道でも取り上げられていたのは学校側の避難誘導の件である。今回の見学では、組織的な意思決定ができなかったのだと判断されていると聞いた。

地震が起きて大川小学校に津波が来るまで51分間あった。しかし、校庭から動き始めたのは50分ごろ。それまで、無線での情報や子どもや保護者からの「山へ逃げよう」との声もあった。しかし、学校側は山では地震により倒木が多くあると判断し、困惑していた。結局組織としての意思決定ができなかったわけだが、私が一人の教員として同じ立場でそこにいたらどうだっただろうとも考えた。当時の教員たちは、近くの山に避難することも考えたであろうが「倒木により子どもたちを危険にさらすかもしれない」という判断のもと、逃げられなかったのかもしれない。「子どもたちを守りたいが、守りきれない状況」にいた教員の立場にも立って当時のことを考えるべきだと思った。

しかし、「万が一、念のため」を最優先に考えることが先決であると思った。「万が一のために避難していたが、津波が来なくてよかった」「念のために高台に避難していたからこそ助かった」と、「万が一、念のため」の避難行動は、結果的に子どもを守る上で非常に重要なものとなるのではないかと思った。

○小学校での学習支援について

今回私は、鹿折小学校で学習支援を行った。以前奈良市でスクールサポートとして学習支援を行ったこともあるが、今までにないくらい受け入れ態勢が整えられていると私

は感じた。私たちがボランティアとして参加するまでに、職員会議で私たち学生をひとりの先生として扱ってくれることなど、事前に確認してくださっていた。

今回の活動内容は1週間分のプログラムも立てていただき、1週間で全学年に入ることになった。発達の段階や、震災が子どもたちにどのような影響を与えているのか、それぞれの学年で見ることができた。現在、小学校6年生も震災当時は1年生で、直接的に震災当時のことをフラッシュバックすることはないと言われているが、甘えたい時期に保護者に甘えることができなかつたり、自分を主張することができなかつたりしたことで、退行現象が見られる子どもも少なくなかった。全学年を見たが、6年生も教師に反抗している児童もクラスに一人いただけで、他の児童は協調的だった。その反抗している児童も、他の児童と仲が良く、クラスで孤立しているわけではなかった。

校長先生が学校の課題として挙げていたのは「学力の低下」である。震災後、学校では特別活動の充実を図った。「毎日来る学校が楽しいと思える場所にしよう」ということを目標にして、学びより楽しさを優先した。私が最初に見た1年生の学習も算数の授業内容が他の学校よりも遅れていることがわかった。しかも、その学習進度にもついていけない児童もいた。学校として、社会に出る際には、皆同じステージで戦わなければならないので、学力の向上は必須だと述べている。しかし、トップダウンの教育にはならないように指導形態などに留意しているそうだった。

他大学とのミーティングで、他の小学校の話も聞いたが、学力の差が激しかったり、精神面の成長の差が激しかったりと、学生が観察していて感じるものは多かった。

○鹿折小学校の防災教育

教室に入ってすぐ目につくのは、一人一人の椅子に掛けてある防災頭巾である。1年生から防災頭巾の扱い方を指導し、もしもの時のために備えている。

気仙沼市内の小学校全校がユネスコスクールに加盟しており、鹿折小学校では特に海洋教育に重点を置いている。各学校の環境に合わせた防災教育が行われており、鹿折小学校は海が近いので、高台に避難するなどの訓練が行われていたり、授業内で防災マップを作成したりするなど、様々な工夫があった。

私が住んでいる奈良県では津波の心配はないが、地割れ・土砂災害・洪水などの災害に対応できるような防災教育が必要だと思った。

○まとめ

今回のボランティアで、はじめて津波の被害の大きさを自分の目で見ることで本当に貴重な時間を過ごせたと思っている。また、大学・学年・専攻が異なる学生で意見交流したことも、様々な視点から物事を考えることができてよかった。

学生の一人が、「なぜ気仙沼で学習支援のボランティアが行われているか改めて考えてみてください」という言葉があった。私自身も今回のボランティアはただの学習支援では

ないと考えていた。しかし、実際に学校に入って「何を見るのか」がはっきりしない部分もあった。校長先生も特別に何も考えないで学習支援に取り組んでほしいとのことだったが、一日一日自分の中で目標や観点をもちながら活動することが望ましいと思った。

奈良教育大学東日本大震災教育復興支援

活動報告書

教育学専修 鎮西 晶太

○被災地訪問・講話

2月12日、大川小学校、戸倉中学校、向洋高校を訪問した。実際の被災地を訪れたのは今回が初めてであった。写真や映像でしか見たことのなかった光景を自分の目で見る事ができたのは非常に良い経験となった。

大川小学校では、佐藤俊郎氏の講話によって当時の様子、大川小学校の置かれていた状況、その後の復興について知ることができた。特に印象的であったのは、津波が来たのは海とは反対の川からだったということだ。川が一気に氾濫し、10mもの波となって小学校を襲った。当時の大川小学校の状況は校長先生が不在で学校の組織としての決定に支障が出たことと、最終的な判断ミスによって児童・教師あわせて80名以上が犠牲となっている。山に登っていたら助かっていたという声も上がっている。

戸倉中学校は、今は公民館となっている。この中学校には1階部分のほぼ天井まで、約22.6mの津波が襲ってきた。津波が来た高さには印がつけてあった。公民館の2階は資料館となっていた。津波が来たときの写真や止まってしまった時計が展示されていた。

向洋高校は、津波の来た部分は窓側が割れ崩れているところもあったが、全体的に見て比較的きれいに残っていた。当時生徒は屋上に避難し助かったらしいが、判断を間違え逃げていたらその間に津波に飲まれていただろうとのことだった。学校という建造物の強度と生き残るための判断によって多くの命が救われた場所である。

○学習支援ボランティア

学習支援ボランティアでは気仙沼市立中井小学校で活動させてもらった。全校児童69名、入ったのは6年生で16名の学級であった。学習する内容はほぼ終わっているのに、授業内容は問題演習がほとんどだった。初日は質問されることが少なかったが、2日目からは児童から積極的に質問してくれることが多かった。

中井小学校は津波の被害を直接受けていないが、児童の中には両親を亡くしている子がいたり、校庭には仮設住宅があり、児童の遊ぶ環境がかなり削られていたりした。しかし、6年生の教室の中ではそれを表に出して見せる児童はおらず、むしろ授業内で津波のことに触れ、今の状況を防災教育に活かそうとしていることが見られた。学校全体でも、火曜日の朝の全校朝礼では防災朝会として、様々な災害を取り上げて防災に対する意識を高めていた。

中井小学校では感じなかったことだが、宿舎でのミーティングでは、他地域の小学生に比べて、精神的に幼い児童が多いということが挙げられた。今の小学生は、東日本大震災当時

は大きくても6歳であり、一番大人に甘える時期に大人がそれどころではなく、かまっていけることができなかったことが原因であり、その時期が今遅れてやってきているのではないかという結論となった。学校側の対応としても、まずは教科学習ではなく、楽しい学校生活を第一に考えているようだった。その影響か、勉強面では少し遅れている児童が多いようだった。

○ボランティアに参加して

今回のボランティアでは、教師を目指すものとしては知っておくべき内容であったと思った。実際、被災地は想像を超えるものであった。倒れている渡り廊下や言われないとそこにあったことすらわからない体育館、どこからどこまでが校庭かも見ただけでは見当もつかないほどだった。また講話の中では、その当時の状況、そのとき先生は何を考えていたのかを考えることができた。当時は津波の前に地震があり、その対応に追われながら、情報が錯綜する中子どもたちを守らなければならない、非常に厳しい状況にあったことが考えられる。しかし、だからと言ってどうしようもないではない。佐藤先生の「できる限り、なるべくではなく、絶対にあってはならないことだ」という言葉が深く心に残っている。東日本大震災のような想定外のことが起きても1秒でも早く対応、判断ができるように学校内で防災マニュアルを徹底することがまず必要なことだと考えた。

学習支援では、子どもがよく懐いてくれたので、何も不自由なく学校生活を送ることができた。先生と子どもとの間の信頼が厚く、先生と子どもが理想の距離感にあるように感じた。16人という比較的少人数の学級であったので、全員と話すことができ、児童一人ひとりの個性や特徴を知ることができた。そのうえで、被災地であることや少人数であることなど子どもたちは一切気にしておらず、他地域の子どもたちと同じように成長をしていると感じた。最終日には女子児童に「なんで帰るの」と号泣されたり、学級のみんなからの寄せ書きや手紙、似顔絵をもらったり、忘れられない1週間になった。最後にみんなと別れてタクシーに乗る直前に、校長先生が「疲れるし大変だけど、これだから教師はやめられない」とおっしゃっていたのが非常に印象的であった。

東北学習支援ボランティアレポート

国語教育専修 黒川 注

今回のボランティアに参加して学んだこと得たものはたくさんあったが、特に印象に残っていることが2つある。

①大川小学校での佐藤先生の講話

ボランティア 2 日目に行った大川小学校で佐藤先生に講話していただいた。佐藤先生は当時大川小学校に娘さんが通っており、震災で亡くされた方である。図や写真などを使いながら説明していただいた。大川小学校は最近ニュースにもなっているが教員の判断ミスにより非常に大きな被害が出た小学校である。実際に現場に行き佐藤先生の話聞くまではどうして教員はあのような判断しかできなかったのだろう、どうしてあだけの命を救えなかったのだろうと思っていた。ただこの自分の考えがなんて浅はかなものだったかと痛感することになった。

佐藤先生がおっしゃっていたことで印象に残ったことが2つある。1つは犠牲者の数だけそれぞれにストーリーがあるということ。もう1つは教員側の視点にも立つ必要があるということである。

1つめは私たちは関西に住んでいると情報はどうしてもTVや新聞など2次元での媒体を通してしか入ってこない。そうすると犠牲者が〇人といわれても実際にはピンとくることはなかった。しかしその犠牲者の数だけ考え方やその当時の気持ち、行動などがあるのだとおっしゃっていた。本当にその通りだと思った。1人として奪われていい命などないという言葉が本当に重く聞こえた。たんにひどい災害だったではなく、本当に尊い命がたくさん奪われたという意識でいないといけないと感じた。

2つ目に佐藤先生がおっしゃっていたのは当時先生方も本当に必死だったということである。自分だけでも逃げたいと思った先生も本当に多かっただろう。でも教師として子どもを見捨てることはできない。しかも自分ひとりでは判断できず先生どうして話合わなければならぬ。自分だったら本当に怖かったと思う。津波の音がすぐそこまで迫っていてそれでも逃げられない。きっと必死だったのである。佐藤先生は実際に娘さんを亡くされている。この「先生を責めることはできない。先生も必死だった。」という言葉と言えるようになるまできっといろんな葛藤があったと思う。だからこそ非常に重く感じた。

②松岩小学校の児童の様子

今回学習支援ボランティアでは気仙沼の松岩小学校に行かせてもらった。松岩小学校は気仙沼では規模が一番大きく生徒数も多い。担当は5年1組2組、4年1組だった。天候にも恵まれて全日晴れであった。最初に受けた印象は本当に素直だということだった。授業

中は静かだし、先生の指示にもしっかりしたがっていた。素直すぎて逆に不安になるぐらいだった。また本当にのびのびとしているなと感じた。休み時間はほとんどの児童がサッカーや縄跳び、鬼ごっこなどをしていた。教室でだらだらしているとか、寒いから外にはいかないという児童は少なかった。私は大阪の小学校で実習に行ったが、この学校ほどのびのびしている様子はなかった。しかし授業や学力といった点では少し遅れているのかという印象も受けた。先生に聞くと震災で保護者の方の仕事などが忙しくなり、宿題などの家庭学習がうまくいっていないのではないかということだった。6年経った今でも震災の影響が出ているのだと知り、衝撃だった。学校としてやはり学力は目をそむけられない点ではあるが、一概にそれだけで学校の物差しは計れないと思った。

この2点が特に印象に残ったことであるが他にも非常に多くの学びがあった。このボランティアに参加して非常に視野が広がった。本当に参加してよかったと感じる。来年も時期やタイミングがあればぜひ参加したい。

防災フィールドワーク

～南三陸町立戸倉小学校の避難について～

第17次及び第18次派遣において、現地研修の一環として、宮城教育大学が実施していただいたフィールドワークで使用された麻生川敦先生（震災当時、南三陸町立戸倉小学校校長、現在は登米市立東向陽台小学校校長）の作成された資料を転載し、後世に伝えるべきものとして、了承を得、転載するものであるので、震災当時の現場状況把握の参考とされたい。

東日本大震災における戸倉小学校の避難について

～児童の引き渡しを終了するまでの避難について～

南三陸町立戸倉小学校

校長 麻生 川 敦

1 戸倉小学校の概要

本校は、南三陸町志津川の志津川湾南岸沿いに位置し、学区内に国道 45 号や国道 398 号が通っている。毎年秋になるとサケが遡上するなど極めて自然環境に恵まれている。

昭和 61 年 4 月県教育委員会から 2 年間、ふるさと教育の研究指定校に指定され、それ以降 25 年間にわたり、学校と地域一体となって、体験学習を基軸にすえた「ふるさと教育」を継続してきた。この理念は、『地域と学校が一体となって、明日のふるさとを担う子どもについて考え、明日のふるさとへの夢を語るとき、地域全体に学ぶ意欲が醸成され、価値ある目的に向かって共に学びあいながら努力する学習社会が形成される。』というもので、言わば「戸倉の志教育」ともいうべきものであった。

この取り組みでは、「ふるさとを知り、ふるさとを愛し、ふるさとを創る子どもたちの育成」を合言葉に、様々なふるさとの学習素材を取り入れ、親と教師が子どもたちのために一生懸命協働する姿を見せることの大切さを認識しながら、ふるさとを創る主体を育て上げてきた。その精神は脈々と引き継がれて、学校と地域の結びつきを強固にし、当時の児童は今、保護者としてふるさと教育を支える人材となっている。

2 東日本大震災における被害の概要



平成23年3月11日 16:26 水没した戸倉小を臨む

10日前に完成引き渡された体育館

- ・ 3階建て校舎 屋上まですべて水没し、中の施設・設備・備品を含めて全壊
- ・ 体育館、プール、植栽など校舎外の全ての施設・設備も全壊
- ・ 児童の家庭 全壊戸数 家庭の8割(当時)
- ・ 教職員の家庭 住居全壊8名(当時)

- ・保護者の被害 父親死亡 1 家庭
- ・児童の被害 死亡 1 名（当時 2 年 1 名）
- ・教職員の被害 死亡 1 名
- ・学校再開時に減少した（転出した）児童数 25 人
- ・一時転出したもののその後もどってきた児童数 7 人

3 戸倉小学校の立地と防災計画について

南三陸町立戸倉小学校は、南三陸町折立浜から約 300m 内陸の場所に建ち、50 年前のチリ地震津波の際には、校舎の一階が水没する被害を受けている。このため、町のハザードマップでは、レッドゾーンに入っており、台風や大水の際の避難所としては指定されていたものの、地震・津波時には指定避難所からはずされていた。



地震津波の避難マニュアルは、第一次避難として、校庭南端の校舎から離れた場所に集合し、津波の危険がある場合には、学校の北西 400m ほどの道のりの場所にある宇津野高台へ二次避難を行うことになっていた。毎年の訓練では、授業中の避難はもとより、休み時間中の訓練を行ったり、下校途中の避難について考えさせたりしてきたが、実際におこった地震とそれに伴う津波警報・津波注意報において、高台まで避難することも珍しいことではなかった。

しかし、隣接する戸倉保育所のマニュアルは、地震津波の避難場所を「戸倉小学校屋上」と定めていたため、小学校が避難する際は高台への避難をしながら、保育所が校舎の外側から屋上へ上がるための非常階段の、屋上に通じる扉の鍵を解錠せねばならず、避難訓練のたびに違和感を感じる職員も少なくなかった。

4 地震・津波避難マニュアルの検討

平成 21 年度末の学校評価において、このマニュアルの内容とともに、「第二次避難の際に国道 398 号をわたること」「第一次避難から第二次避難まで 5 分を要すること」「避難した後を野外で過ごさなくてはならないこと」などを議論の中身として、避難計画の検討を

行った。

昭和35年のチリ地震津波被害の水位は2階までも達していない。校舎が地震による損壊さえなければ、十分屋上への避難で安全を確保できると考えられた。消防署の意見も同様だったので、第二次避難場所を宇津野高台から屋上への変更する原案が提案された。しかし、地元出身の教職員からは、昔から言い伝えられている「地震が来たら、津波。津波の時は高台へ」という鉄則を変えるべきではないという主張があり、平成22年度の計画はそのまま宇津野高台を避難場所とし、内容を1年間検討することにした。

平成22年度、避難訓練時に消防署から、屋上への避難は妥当であるとの見解をいただいた。また、チリ地震津波50周年の特別シンポジウムにおいて、宮城県沖地震のシュミレーションが披露され、津波の到達時間は最短で3分の場合も考えられることがわかった。

このことをもとに、地震の際に注意報・警報が発令されるまでの時間を調べてみた。すると最短でも5分の時間がかかることがわかった。さらに、様々な津波被害を調べると、北海道南西沖地震では、地震後3～5分で奥尻島を津波が襲っている。地震が起こった場合、通常机の下に避難するが、これに1～2分かかったとすると、最短時間で津波が到達すれば、1次避難場所へ移動している時に校庭で津波にのまれることになる。

これまで高台への避難を行うのは、津波警報または、津波注意報が出た時だけであった。この場合、机の下での避難が1, 2分、その後校庭に集合して津波警報（注意報）を確認するまで5分、そこから宇津野高台へ小走りに移動して少なくとも10分の時間が必要である。津波までの時間が短ければ、高台避難はたいへんなリスクをおかすことになる。しかし一方で、屋上への避難はその後の避難へつなげる可能性が低くなり、海の中に孤立して水がひくまで耐えなくてはならない状況も考えられ、児童の負担が大きく、危険であるとの主張もなされた。

この検討は、この先ゆきどまりとなった。最短時間で津波が来たときには、たいへん危険な状況であるが、その時々で、屋上か、高台かは校長が判断することになった。そして、一連の議論について専門家に相談をし、助言をいただくことにした。

この話し合いは、最終的に避難経路を選択する形として議論を終えたが、その間に話し合いの中から、様々な避難の時の留意点や役割分担が具体的に決まっていた。

高台へ逃げるためには、津波の情報を常に聞き取れる環境が大切である。そこで、逃げるときには必ず「手回し発電機付きのラジオ」をもつことを決めた。また、教務主任は教育計画の入ったUSBと児童の連絡先が記入された児童名簿を、養護教諭は救急セットと防寒具を持ち出すこと。さらに、避難した経験から「津波の避難は何も持たない」という原則を、「冬の避難には防寒着」という内容にすることで意志統一をした。

5 東日本大震災の発生から高台への避難

3月11日（金）14時46分、地震が発生。これまでに経験がない揺れで緊急放送は停電のため使用不能、防火扉が閉じ、火災報知器がなり出す。5分程度で揺れがおさまる。揺

れの大きさから教頭と宇津野高台への避難をすぐに決定。肉声により校庭への避難を指示した。保育所避難路の確保を終え、高台への避難時間短縮のため一次避難を省略。玄関前で点呼してすぐに避難することを決定。高架水槽水漏れの報告あるも、そのまま放置。

決定事項どおり、教務主任が児童名簿と USB を、教頭はスイッチを入れたラジオを、養護教諭は、救急セット、ふとん、毛布を、担任は防寒着を児童に持たせて避難した。

教室から避難した児童と、既に放課され、校庭に残っていた1, 2年生も含め91名が玄関前で点呼。(この日在籍107名、欠席5年1名、早引き5年1名) その間、教務主任は国道398号を横断する箇所に、避難児童の交通整理のため走って移動。

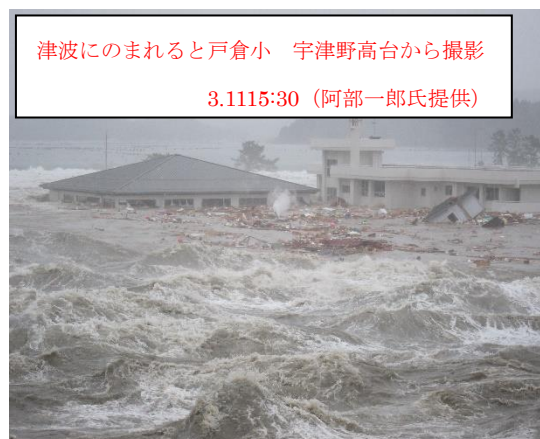
点呼中にラジオにて、大津波警報(6m)の発令を確認。点呼後、すぐに高台への避難を開始した。保育所も屋上避難をやめ高台への移動を開始していた。3時少し前であった。

15時頃。高台で点呼。学校にいた91名全員が避難完了する。小学校の他、戸倉保育所の園児、折立地区からの避難者が続々と集まり、高台は乗用車もいっぱいになった。ラジオで、津波の第1波は女川に3時10分に到着するとの情報が流れた。

この時、初任研担当非常勤講師から、年休中の夫のため帰宅したいとの申し出を受ける。大津波警報を理由に止めたが、引きとめることができなかった。そして、これが最後の別れとなった。不明の児童は、欠席と早引きの2人を除いて14名、そのうち7名は学校近くのそろばん塾に出かけた2年生で、あと7名は下校した児童である。このうち、そろばん塾の7人は、後刻メールで無事に戸倉中にいることを確認した。消防団からヘルメットと拡声器が校長に渡され、ここからは全体への指示を校長が出すように依頼される。

15時10分を少し過ぎてから「女川に潮位の変化があった。大津波に警戒するように」とのラジオ放送があり、大津波警報が10m以上に変更となる。防災無線も高台への避難を呼びかけ、その後大きな潮位の変化を観察したとの放送があった。そのうち、遠くに見えていた波が大きくなったかと思うと、海岸に設置されている防波堤が倒されたようにみえた。

15時30分ごろ、ばりばりばりと耳をつんざく重機のような音があがり、折立の住宅地が壁のような波に押しつぶされ煙をあげながら破壊されていくのが見えた。



「みんな、上に上りなさい」と高台からさらに上に続く小道を拡声器で指示した。2日前の津波注意報の避難時に寒さよけのために確認した五十鈴神社に続く道である。保育所から順に、小学生、大人と神社にかけあがる。高齢者は、大人が手をかしたり、背負ったりして上った。

ばりばりという大きな音が、階段の後ろから追ってくるように聞こえてくる。ふりかえると、宇津野高台に水のかたまりが押し寄せて乗用車や二階建てのアパートが流れて消えていった。周囲は水に囲まれ、五十鈴神社は島のように孤立した。

神社前で点呼、91名全員を確認。あとから判明したことであるが不明であった児童7名も、3名は荒町に帰宅、4名は高台までの避難を行っていた。しかしその中の女子1名は、安全と思って避難した高台で津波に襲われ命を落としている。

津波が引き始めて、宇津野高台が再度姿を現したのは、16時25分頃であった。この時、津波は繰り返し押し寄せ、より高い波がやってくる可能性も高いことから、五十鈴神社よりも高い場所に避難すべきではないかとの提案があった。しかし、移動は一度高台から降りなくてはならず、どこをめざすかもわからない。

周囲を歩き状況収集にあたったが、病人やけが人、妊婦、保育所児童等の移動は余震と繰り返す津波の危険性を考えると難しいと思われた。また、火をたきながら150人が夜を明かせる場所があるかも疑問である。そこで神社境内にとどまる決断をした。数名はより高い場所への移動を希望したので、自主的な選択を尊重し移動する事も了承した。（移動した数名は後刻また高台へもどり合流した。）

6 五十鈴神社の夜

宇津野高台は指定避難場所ではあったものの、備蓄されているものは一切なく、五十鈴神社で利用できそうなものは、ろうそくだけであった。

雪が舞い、寒さが厳しくなる。地域の方と協力して境内でたき火を始めた。間隔をとりながら、神社境内に5つ、神社から階段を下がった鳥居の前に1つ、水が引いた宇津野高台の海を見晴らす場所とそこから少し離れた場所に1つずつ、計8つのたき火がつけられた。高台のたき火には、男の人たちそれ以後ずっと海の見張りに立った。また、周囲の家から使えるふとんやマットレス、毛布を運び、子どもたちやけが人に配布した。

夜が近づいていた。野外で夜をこすことは低学年には困難である。しかし、五十鈴神社の社殿は地震で瓦が偏り、大きな余震があるたびに危険性を感じていた。そのため児童には近寄らないように指示していたが、寒さの中の避難がいつまで続くかわからないため、4年生までの担任と児童、妊娠中の教員を社殿に入れることにした。5、6年生は、それぞれ1つのたき火を囲んで暖をとることにした。

その晩、男の人たちは薪拾いをしたり、周囲の家から食料や飲み物などを運んでくれた。教職員も担任以外の男性職員は、薪拾いに従事した。飲食物については、これからどのようなことになるかわからないので、子どもたちのために学校で管理してほしいと提案された。

大人の行動はとても統率がとれており、区長さんや年長者が中心となって指示を出し、働き盛りのお父さんたちが動いている。振り返れば、避難してから全ての人たちが、自分のできることをさがして協力しており、担任の教師は安心して児童のケアに集中することができた。避難してきた方々がリーダーを中心にまとまった行動ができるのは、地域の力である。日常の地域力が非常時には大きな力を発揮するのだとつくづく感じる。

この日の夜は、長い夜になった。ラジオは、仙台市荒浜や仙台新港、仙台空港の被害を伝え、それが尋常でないことを知らせてくれた。また、度重なる余震や暗闇の中を間近に迫る津波、木が折れる音などが、子どもたちの恐怖をより深くした。

担任は、そんな児童のようすをみて「9時からキャンプファイヤーだ」と語りかけて、卒業式の歌を合唱したり、雪の合間に広がる空で星座の観察会をしたり、みんなでかたまってチョコレートを食べたりながら、児童を励ました。子どもたちの中からも、お互いに励ましたり、楽しい話を出したりと、支え合おうという動きがあった。

社殿の中の低中学年は、親と離れてすごす夜の不安から涙を流す児童もいたが、担任や友達と話をしながら、パニックに陥ることもなく夜をすごすことができた。

夜中の2時過ぎに燃やすものがなくなってきた時、男の人たちが津波で流された高台のアパートの土台から角材をはずして運んできた。このおかげでたき火は朝まで燃え続けた。

未明頃からは、学区山の手の荒町から山越えをしてやってくる保護者が増えた。この人たちからの情報で、荒町は無事で食料の炊き出しをしている事、そこから45号線を下った西戸地区は壊滅状態であり、多くのがれきで歩くことが困難であることがわかった。

7 戸倉中学校へ

3月12日。朝になると、荒町から暖かいおにぎりの差し入れがあった。夜通し飯を炊き、おにぎりを背負って運んでくれたのである。半分ずつ食べた暖かいおにぎりは、朝の光とともに、元気と笑顔を思い出させてくれた。この後、食料は3回ほど届けられた。

子どもたちの2日目の野宿は避けたいと考え、避難先として下記の3つを考えた。

①「指定避難場所の戸倉中学校」

全員がゆったりと建物の中に避難でき、自衛隊の支援が受けられるが、津波警報の中を高台から下りて15～20分歩かねばならない。被害状況もつかめていない。

②「津波被害のない荒町地区のセンター」

荒町地区のセンターは、陸づたいに登米市への道路が生きており、物資の受け取りや医療面が保証される。また、海から遠ざかり津波の危険はほとんど0となる。しかし、やはり津波警報発令の中で高台からおりて、1時間以上歩かねばならず、がれきの中、低学年や高齢者、けが人などの移動は困難である。

③「高台で被災した家屋の2階」

高台に残っている建物の2階は持ち主の許可を得ることができ、移動しなくてもすむ。しかし、1階部分が津波被害に遭っており、また津波に襲われる可能性を否定できない。

何人か荒町からやってきた大人の人たちからの情報を総合すると、病気やけがの方々と幼児をつれて、荒町地区へ避難することは不可能であると考えた。また、戸倉中学校の様子がわからないので、昼まで宇津野高台へとどまり、その間、教頭に避難経路の状況も確認しながら、中学校の状況確認と合流の可否について相談してきてもらうことにした。

一方で、高台は児童を迎えに来る保護者が増え始めた。ほとんどが、荒町地区など、家が安全であったり、残った家庭や安全な親戚の家に連れて行きたいという申し出であった。また、数名服薬が必要な児童がいたが、その子どもたちも、保護者が迎えに来た。教務主任に帰路の通り道を確認し、帰宅する場所を記録して帰宅させる手順をとった。記録は、ランドセルを背負って逃げた1年生の連絡帳を借りて行った。

また、境内には、酸素ボンベを使用している高齢者もあり、残量がなくなりつつあって早めに医療機関に連れて行かねばならなかった。また、津波の際あばらにけがをした女性も避難しており、シートで周りを囲み、養護教諭が胴部を新聞紙とガムテープで固定していた。寒さを訴えており低体温症になっていることが危惧された。児童にとってもやはり野外は寒かった。なんとか暖をとれないかと考えていると石油ストーブと石油が見つかった。津波の危険性もあるが、2件の民家の二階を借りてストーブで暖め、けが人と子どもたち、高齢者、病人を休めることにした。一度高台に下りるので、海を見張る人をおいての移動となった。

この移動中に、高台の見張りから、「大波がくるぞ、逃げろー」と声がかかった。とっさに「もどれっつ」と拡声器で声をかけ、全員があわてて神社の境内へもどった。しかし、実際には津波はこなかった。海の状況把握の難しさを実感させられた。再度建物への移動を行い、みんなが二階へ移動できた。けがをしている女性は暖かい部屋のベッドで休ませることができた。

児童が建物に入ったころ、教頭がもどってきた。戸倉中の一階が被災、中学生1名、教員1名が命を落としたことが判明する。志津川公民館長と戸倉中校長、町の職員が避難の中心となっており、消防団も自衛隊も合流しているとのことであった。そして津波警報の中での移動は原則許可できないが、移動するなら、消防団が先導をしてくださるとのことだった。けが人や病人の対応が急がれることから、戸倉中学校への移動を決定した。

13時10分、けが人や病人、高齢者には援助者がつきながら、迎えに来てくださった消防団の方といっしょに戸倉中学校へと向かう。(重傷者は戸板で搬送)道にはがれきが積み重なり、傍らには流された乗用車が何台もつぶれていた。子どもたちの視線がいかぬように、なるべく何も無いところを通るようにする。最後尾が学校に着くまでには30分程度かかったように思われる。ここで、けが人と病人数名は、ヘリコプターで搬送されていった。中学校に避難していた方々と合流し、小学校避難者は、二階のパソコンルームを使用することになった。

しかし、当初の避難場所宇津野高台には、これからも子どもたちを心配して探しにくる人

が訪れることが考えられた。書き置きもできない場所であるため、教頭と地域の方数名を配置し、もう一晚、火をたきながら過ごしてもらうことにした。指定避難所、宇津野高台の場所を知らせるためである。

子どもたちは登米市から運ばれたコンビニ弁当の夕食を食べて、屋根のある場所で眠ることができた。しかし、妊娠している女性教員の体調は思わしくなく、2晩めになる寒さが心配であった。

8 登米市への移動

3月13日。早朝から、地域の方々により戸倉中学校敷地内のご遺体を体育館へ運ぶ作業が行われていた。戸倉小学校の男子職員も、朝に高台からもどってきた教頭も含めて全員で作業を手伝う。津波の威力のすさまじさを改めて痛感する。

午前8時30分。前日に、登米市と連絡をつけていただいた町職員の方から、登米市から荒町に救援のバスが着き、登米中学校へ避難させていただく手はずが整ったことをきく。荒町までは登米市の消防団が危険のないように道沿いに配置されるということで、10時に徒歩で荒町へ向かうことになる。

午前9時、比較的大きな余震が8時台に発生し津波注意報が出ていた。津波の危険がある場所を通ることから出発を遅らせ、11時を出発時刻とする。模造紙やポスターの裏に、登米中学校へ移動する児童の名前を一覧表にして書いて3枚作り、1枚を戸倉中学校の壁に掲示しておいていくことにした。

学区で一番遠い地区、寺浜地区は、津波で残った家屋が多かったことから、地区の集会所を避難所として、地区の復旧作業を行っていた。しかし、海にも近く危険も考えられることから、登米の安全な場所に避難するなら児童を預かってほしいとの要望があった。登米市は食料の不安も少ないことや、学校も当分は避難所運営するしかないと考えていたため了承して、子どもたちを預かることにする。

また、教職員もこれまで家族との連絡がとれず、心配をしている者も多かった。登米市へと移動すれば、南三陸の状況を知るのが難しくなると考え、南三陸町に住み、徒歩で帰宅可能な職員を移動の途中で自宅に向かわせることにした。そして、帰ってこれない場合には、地元で避難所の仕事を行うように話した。このことで、女性職員4名が南三陸町へ向かうことになる。さらに、仙台から乗用車で県の義務教育課職員が来訪したため、妊娠しており体調のすぐれない教員を仙台の実家へ送り届けるように依頼し、仙台へ帰した。

午前10時45分。小学校を先頭に、登米市の消防団の方の誘導で、荒町まで徒歩で移動する。途中がれきの山や、折立川などを越えなくてはいけなかったが、要所要所に登米市の方が配置され、地域の方とも協力して橋をかけたり、危険ながれきをよけたりして、通路を確保してくださった。その徹底した安全確保は組織だってすばらしいもので、登米市の力を感じさせられた。途中からは危険性が少ない気仙沼線の線路跡をとおって、荒町のセンター（集会所）に到着した。センター内にも移動する児童の氏名一覧表を掲示した。

午前12時、荒町センター前には、宮城交通のバスが待っており、そのバスで登米中学校まで移動した。

午前12時30分、登米中学校に到着。この時学校と行動を共にしていた児童は33名。ただし、家族も一緒に避難していた児童もいた。登米中学校ではたくさんの寝具や衣類も集められており、やっと避難所として機能する場所に到着したと感じた。この日から、寝具で休めるようになった。

3月14日。帰宅していった教職員3名が戻ってくる。被害は甚大であったが、なんとか工夫して山越えをしてもどってくれたことに、心から感謝する。

この後、日を迫うごとに子どもたちは、迎えに来た保護者に次々と引き取られていった。

寺浜の児童は、最後まで残されていたが、精神的にも疲れ、体調をくずす子も少なくなかった。そこで保護者が引き取りにきて、児童全員の引き渡しが3月16日に終了した。この日は、登米中学校での避難所の再編も行われ、戸倉小学校と戸倉中学校は、登米中学校の図書室で学校の運営を再開していくことになる。

行方がわからなかった7名の児童のうち6人まで安全を確認したが、児童1名と非常勤講師の行方は、この日になってもつかめなかった。学校では交代で遺体の搜索や遺体安置所での確認作業、搜索願の提出なども行った。しかし、なかなか見つけることはできなかった。

9 児童引き渡しまでの避難を振り返って

この後、本校は「学校拠点の確立」「児童の安否確認と心のケア」「職員の生活基盤の確立」を3本の柱として、復旧へ向けての活動を開始し、5月の学校再開に向けて、児童の心のケアを経営の中心に据えた、学校運営方針の全面的な見直しとその具体策の設定。学校再開にかかる物品の確保に向けた、県、町との連携と民間の力の活用、ホームページによる情報発信による支援団体との関係構築などに着手していくことになる。

児童引き渡しの完了までの避難について現段階において、検討した事項については以下の通りである。

1) 避難マニュアルの作成は完全をめざしながら、常に多面的に検証し、評価を加えなくてはならないが、その運用については、「完全に安全なこと」はないとの認識で、選択肢を考えたり、判断場面を設定するなど柔軟に運用できるものが必要である。

2) 避難訓練などで常に避難マニュアルを検証し議論していくことで、一つ一つの具体的な対応について考えをもつことができたことが、今回の震災避難に生きた。

3) 日常的に何でも話ができる職員集団であったことが、マニュアルの検証にも具体的な避難の判断においても、大きな力を発揮した。

4) 日頃から地域全体がリーダーを中心によくまとまり、避難や搜索についての意志決定、安全対策などを自立して行っていたことで、学校は子どもたちのケアを中心とした活動に専念できた。

5) 日頃から地域の方々と協働で教育を進める活動を続けてきたことで、地域のリーダ

一と学校の関係が深く、このことが避難活動の意志決定や学校と地域の連携活動をスムーズに行う面で、たいへん大きな力となった。

6) 日頃の避難訓練や津波についての学習により、児童は一人でも高台への避難を行うことができた。しかし、避難指定された高台に上れば安全であるとの過度の認識があったので、そこから先に避難する場合がある事も指導しておく必要がある。

7) 津波警報の中、絶対に帰宅や下校はさせてはならない。

8) 避難のそれぞれの場面において、せまられる判断はベストの判断をしようとする決断できない。情報の収集から、短時間でベターの選択をすることが望まれると思う。9) 津波の避難においては、必ず海が見える場所の確保と海の状況の監視が必要である。10) 携帯電話などが使えない状況下での、移動する避難については、情報を伝えるために書き置きする道具が必要である。

11) 学校の中に地域をよく知る教職員が必要である。今回、地域の保護者で誰と誰が仲良しで、連絡が取れないときには誰に連絡すればよいか等、地域素材だけではなく、人と人との関わりなども、よく理解している教職員がいたおかげで、安否確認などの作業がスムーズに進んだ。経験年数が少なくとも、できる範囲で地域に溶け込み、地域理解を進めることが大切である。

12) 津波避難の際には、発電機付きのラジオ（できれば携帯電話の充電できるもの）、重要な文書ファイルのバックアップ USB、児童の連絡先名簿、救急箱、携帯電話、

防寒具（冬）など必要と思われる物を検討しておくことが必要

現地視察

～気仙沼市大島の防災フィールドワークに同行して～

東北教育復興支援の第1次派遣時より、事前指導において「子どもへの心理的支援」と、活動終了後の学生への事後指導を担当してきた本学 教育臨床・学校カウンセリング領域の市来百合子準教授が、学生に同行した報告書を掲載。

気仙沼市大島の防災フィールドワークに同行して

次世代教員養成センター

教育臨床・学校カウンセリング領域

市来 百合子

6年前、震災後2ケ月経って、私は岩手県教委の派遣で京都の臨床心理士会から沿岸部に位置する高校にスクールカウンセラーとして入り、その活動の一端を担わせていただいた。その経験もあって、奈良教育大学の第1次派遣から第17次派遣までの学生ボランティア派遣の度に、学生たちに災害後の子どもたちの心理的反応やその後の支援などについて事前学習としてレクチャーし、心理的な面での事前準備を手伝ってきた。しかしその内容は、年数を経るごとに、実感を伴って話ができない状態になってきた。なぜなら、私自身が東北の情報にはもはや耳にすることはぐんと減り、多忙にかまけて東北に思いを馳せる機会が少なくなったからだ。

実際、今の東北沿岸部はどのような状況になっており、子どもたちを含め地域や学校はどのように生活しているのだろうかという疑問から、2016年8月、宮城教育大学が派遣される学習支援活動の一部である防災フィールドワークにはじめて同行させていただくことになった。まず8月21日初日に気仙沼港から大島に向かってフェリーに乗り、その後、亀山の展望台から大島を見渡して当時の様子を聞いたり、牡蠣の養殖をしておられる会社の方に話を聞いて船に乗せていただいたりした。学生はその後グループで民宿までの道のりを地域の方々に話を聞きながら帰るというプログラムを設定して下さり、夜は大島のフェリー（大島汽船）の白幡社長にお話を聞かせていただく機会を作っていただいた。私がとりわけ印象深かったのは牡蠣の養殖会社を営んでおられるご夫婦の奥様が、あの時のこと、そしてその後の復興のことを話してくださったことである。東北大震災の前のチリ地震の教訓によって、大震災の起こった時にはできる対策のほぼ全てをとっていたこと、必要な食料やものは高台の倉庫に入れていたこと、それによって決定的な打撃は回避し、その後に様々な人とのかかわりによって比較的早急な牡蠣養殖の復興が可能になったことなどは感動的なお話しであった。自分なら災害を経験しても、次に備えて万全を期して生活することができるのだろうか？また少しの余裕ができたとしても他の人に与えることが果たしてできるのか？またそれによって次の展開が生まれて、今では更においしい牡蠣を提供しておられるに至る限りないエネルギーと底力を小さなお婦人の語りから感じる事ができた。また乗せていただいた船上ではご主人が海と牡蠣をこよなく愛されている様子が伝わってきた。このご夫婦は、次の日もどしゃぶりのなか、見送りに来てくださりフェリーが大島を離れるまでいつまでも手を振っていた。

心理学の中でここ数十年テーマとなっている中に「レジリエンス」という言葉がある。これは、もともと物理学の用語で「外的な力を跳ね返す力」を意味する。虐待や災害、貧困な

親の精神疾患などなど様々に極端な不利な状況の中でも、全員が大人になって難しい症状を呈するわけではなく、そうならない人も多くいる。その人たちは一体何が違うのであろう？という探求が始まった研究分野である。柳のような粘り強さ、回復力を示す言葉で、まだ議論の終結を見ていない複雑な概念でありながら、おおむねその特性としては「新規性追求」（新しい刺激を求める気持ち）「感情調整」（気持ちをコントロールできること）「肯定的な未来志向」（未来をポジティブに捉えること）が挙げられている。さらにそこにはユーモアやある種の楽観主義、そしてサポートしてくれる人がまわりにもいることも大事な要素となっている。

今回私がお会いした大島の方々はまさにこの言葉を生きている方々であった。「あの時」のことも語っていただいたが、それよりもむしろ今・ここから自分たちの生活をどのように豊かにしていくのかが多くの話題であった。とりわけ我々が訪れた時は、島から市内に橋がかかること・が話題になっていた。フェリー会社の白幡社長も旅館のおばさんも語っておられたこの話題は「一見、便利になる」架橋だが、学校も地域になくなることで地域が衰退するのではないかという危惧の内容であった。豊かさとは「便利」でなく、地域の絆の中で子どもたちの成長に寄り添うというストーリーを地域の未来として描きたいという思いのように聞き取れた。

そのような未来への志向は、やってきた若い学生を暖かく迎え受け入れてくださるということにも通じているのかもしれない。大島だけでなく、この派遣自体が宮城教育大学の主導のもと、未来を作る若者（学生）をととても大切にしていることを実感した。2日目に気仙沼市の教育長とも少しお話をする機会が偶然にもあったが、気仙沼市には大学がないということで、子どもたちが若い大学生と交流することを肯定的にとらえていただいているようであった。学生たちは、大島の翌日からそれぞれの小学校に移り、夏休みに補講で来る小学生、中学生に個別の学習支援を行った。

これまで 17 次の派遣全ての学生に帰還後に話を聞くことを事後指導として行ってきたが、派遣先はそれぞれ異なるものの、ほとんどの学生たちは「とても楽しい」一週間だったと語った。「楽しい」の意味はそれぞれ異なるが、1つの要因は他大学の学生と、このような形で交流したことによる経験であると思われた。特に、様々な形で震災を体験している宮城教育大学の学生との交流や他大学の学生が地域の支援に対して意識を高くもっていることに触れ、教師を目指す学生は大いに刺激をうけていると思われた。また、実際に学習支援を行って、子どもたちの学力向上にどれだけ寄与できたかどうかはわからないが、確実に子どもたちとのちょっとした会話や表情に触れて、卵ながらも教師魂が刺激されたことも事後面談からうかがえた。このような形態の派遣の中で、自分がどのような教師になるべきかそのために今、何をなすべきかということについて考えを巡らせることは、教育大学生のキャリアパスにおいて非常に重要であると思われる。今後も引き続き、災害支援・学生ボランティア・学習支援というキーワードで派遣が為されることを望むものである。

東北教育復興支援後の取り組み

～地域と共に減災教育を考えるプロジェクトへの展開～

宮城教育大学と奈良教育大学の連携により実施されている「東北教育復興支援」に参加し、学ばせて頂いた学生は、延べ111人になりました。参加学生は子どもたちの心に寄り添い、学習支援や教員サポートを経験することで、各自が深い思いと教育への新たな情熱を抱いて帰ってきました。学生は被災地へ行くことだけで多くのことを学びますが、特に災害時に子どもたちの体と心を如何に守るか、減災教育や、地域との連携の重要性に気付いたようで、将来の教員像に対する課題の一つとして「減災と地域」に対する意識が芽生えました。

そして、取り組むようになったのが「地域と共に減災教育を考える「KYOU-YOU」プロジェクト」である。

地域と共に減災教育を考える「KYOU-YOU」プロジェクト

ボランティアサポートオフィス

小島道子

背景にあるもの

2016 年度より、宮城教育大学のセンター再編により、教育復興支援センターから、防災教育未来づくり総合研究センターになりました。全国の大学から東北教育復興支援活動と共に、被災地を見学・フィールドワークを体験し、多くの方のお話を聞き、現地で深く考え、防災教育について多くを学ばせていただきました。

きっかけ

そんなある日、学生から地域と共に学ぶ減災教育についての相談があり、静岡県防災士会作成の「避難所運営シミュレーションゲーム（避難所 HUG）」を紹介しました。

避難所運営 HUG とは

「避難所 HUG」は避難所運営を具体的にシミュレーション体験することにより、「参加者が自分のこととして考える」機会を提供するものです。

地域との連携

以前から協力関係にあった飛鳥中学校区地域教育協議会の方や、飛鳥幼・小・中学校の先生方と実行委員会を立ち上げ、事前研修を行い、当日は奈良県防災士会の植村理事長と本学古田准教授の「奈良で起こりうる地震と地域と共に考える避難所運営」の講演の後、「避難所 HUG」を体験しました。

学生の他に、地域の有志、現職教員、保護者、防災士会、全労済、そして将来地域を担う中学生など、立場や年齢層も多様な方々が 60 名以上参加し、幼い子どもたちを見守る保育室の運営なども地域の方の御協力により実施することができました。

企業との連携

実施するためには資材購入等の費用が発生します。学生は、広く社会にその理解者を求め、助成金申請をすることになりました。こうした学生中心の「自然災害に備え、いのちを守る活動」に対し、全労済地域貢献の助成を頂くことが出来ました。

実施詳細

実行委員会

日時：2016 年 8 月 24 日(水)10：00～12：00

会場：次世代教員養成センターモデル教室

参加者：飛鳥中学校区幼小中校園長、地区教育協議会委員、本学学生

第1回シミュレーションゲーム実施

日時：2016 年 10 月 22 日(土)13：00～15：30

参加者：飛鳥中学校区幼小中校園長、教員、保護者、地域教育協議会委員、全労済職員、
奈良県防災士会、中学生、本学学生

会場：奈良教育大学次世代教員養成センター2 号館多目的ホール

第2回シミュレーションゲーム実施

日時：2017 年 2 月 19 日(日)10：00～12：00

会場：奈良市中部公民館

参加者：奈良市自治防災会、公民館職員、地域教育協議会委員、大阪体育大学学生、
教員、本学学生

協働して

参加者が活動を楽しみながらも「このような場合どうするか」と真剣に悩み、話し合い、共有出来る場を提供できたことは大きな意味があり、自分自身のこととして考えた体験をそれぞれのコミュニティに持ち帰って広げ、皆で考えていくきっかけになればと願っています。

学生の学び

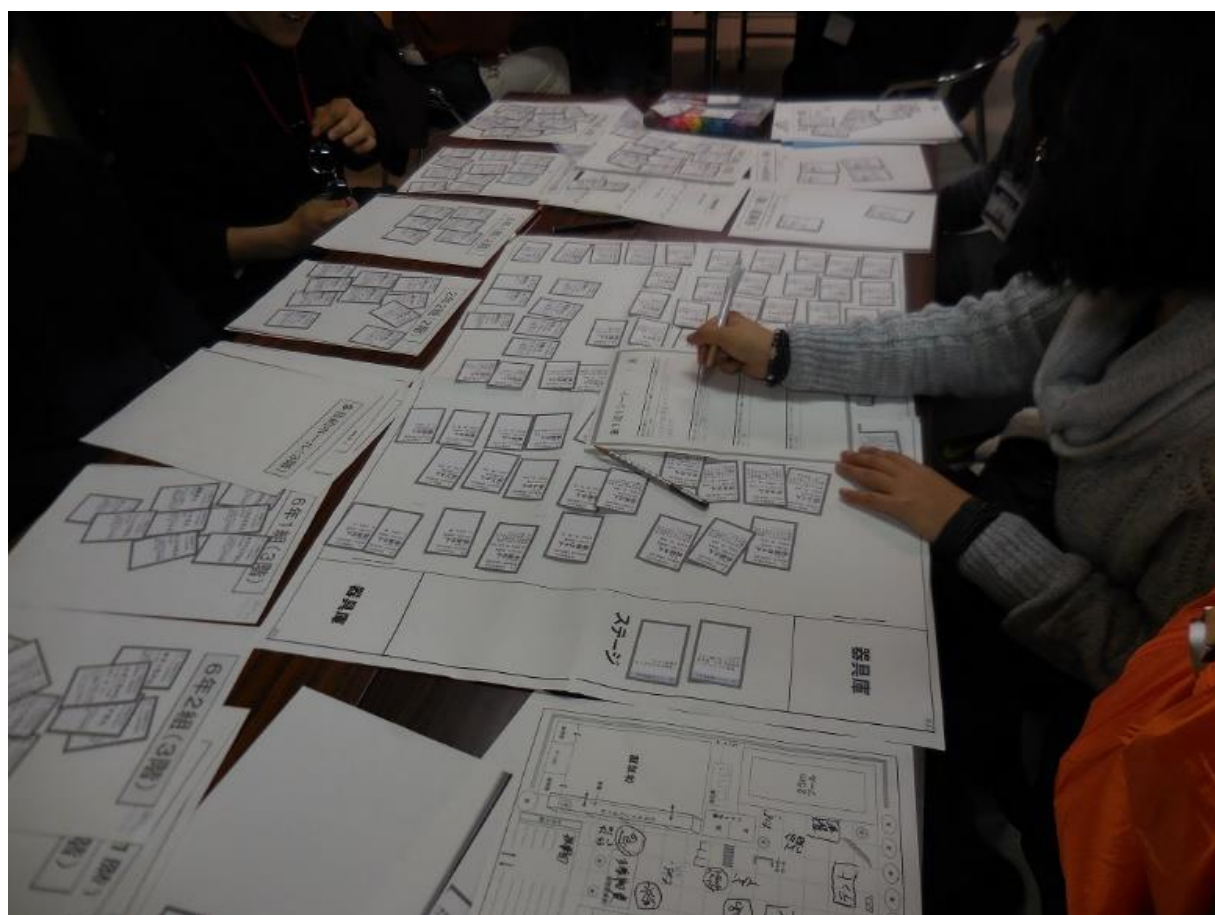
学生は運営していく中で、地域から、社会から多くを学び、中学生の「心から湧き上がる熱い想いや真剣さ」に感動し、「地域と協働して取り組む教育」の必要性や重要性を学びました。

今後、学生には避難所運営だけでなく自ら見出した社会的課題の解決と協働の学びに向けて活動していくことを期待しています。

2016年度

全労済地域貢献活動助成

地域と共に減災教育を考える 「KYOU-YOU プロジェクト」 報告書



国立大学法人奈良教育大学
次世代教員養成センター ESD・課題探求研究部門 学校地域支援領域
ボランティアサポートオフィス 学生スタッフ

企画・活動の経緯

東日本大震災、熊本地震等、近年災害が多発しています。奈良県においても東南海地震が秒読みになっていますが、県内の防災意識は依然低いと感じています。東日本大震災被災地の教育復興支援に行くなかで、被災直後はもちろんのこと、避難した後の生活「避難生活」に多くの苦悩があった現実を被災者の方のお話から知りました。

特に、「障害者や高齢者などは避難生活に多くの苦悩を抱えておられたこと」、「避難所で避難生活さえも送ることができなくなった障害者がたくさんいらっしゃった事実」「学校が避難所となるなか、教員と避難生活を送る地域住民との避難所運営における連携の難しさ」等、災害発生時には『避難所運営』が大きな課題となることを目の当たりにし、その重要性をひしひしと感じました。

活動の趣旨

発生する可能性の高い災害に備えて、私たちは「いま」できることを「考えていく」必要があります。今回の体験会を通して、参加者の方々が災害・減災・防災を自分自身の問題だと捉え、考えたことを地域、学校、家族等、自らのコミュニティーに持ち帰って広げ、皆で考えていくひとつの大きなきっかけになればと思います。

活動実施

第1回

- ・日時 : 平成28年10月22日(土曜日) 13時～15時30分
- ・実施場所 : 奈良教育大学 次世代教員養成センター2号館 多目的ホール
- ・参加人数 : 約70名
学生、地域の方、奈良県防災士会、飛鳥幼小中学校教員・保護者・中学生、全労済職員など
- ・配布物 : 全労済「防災ハンドブックミニ」ほか



第2回

- ・日時 : 平成 29 年 2 月 19 日 (日曜日) 10 時～12 時
- ・実施場所 : 奈良市中部公民館 4 階会議室
- ・参加人数 : 約 40 名
地域の方、奈良県防災士会、公民館職員、地域防災会大阪体育大学学生など

ど

- ・配布物 : 全労済「わが家の防災ハンドブック」ほか
- ・第2回は特定非営利活動法人奈良NPOセンターと奈良市が共催し、開催した「出会い
ウィーク 2017」にて開催。



活動内容

あいさつ

- ・本日の参加者について
- ・全労済からの助成金で活動していること
- ・本活動の目的・背景について
- ・当日の全体プログラムについて説明
- ・写真撮影の許可について

奈良教育大学 古田准教授からの講演

・奈良で起こりうる災害について

熊本地震等を例にとり、奈良県の被害に関わるものを中心に、国が出している各断層帯の発生確率の数値の高さを具体的に説明していただいた。

地震発生時、奈良県より周辺地域の被害が多くなるため、支援は被害の大きい地域に集中する。そのため、奈良は物資が届かず孤立するだろう。通常 5 日間～1 週間の備蓄が必要とされているが、奈良県においてはそれ以上必要となることが予想される。

・考えることの必要性について

災害時のことを自分や家族の問題として考えることができていない。

想定することとそれへの対応は、「家族構成、地域、時間軸」などの「組み合わせ」によって違う。だからこそ、「自ら考える力」が必要。

皆で考えるためのひとつのアプローチとして避難所 HUG を使いシミュレーションする事の必要性。

・教員と教員を目指す学生が地域住民とともに避難所運営を考えることの大切さ

学校教員は「子どもの命を守る」ことが一番の仕事。授業の再開も考えていく必要がある。学校が地域の避難所となったとき、避難者自身の避難所の自主運営を基本としながら、教員と地域住民が連携して避難所運営を行っていくことが大切。そのために、いま、災害時に発生することについて、「想定内やできることを増やす」「考えたことを行動に移すこと」が大切。



避難所 HUG 体験

- ・第 1 回目は 8 グループ編成。第 2 回目は 4 グループ編成。
- ・各グループ内で自己紹介とアイスブレイキングを行う。
- ・防災士会講師、植村さんから避難所 HUG についての説明

- ・グループごとに HUG 体験開始

・防災士会講師，植村さんから振り返り

〔運営側の視点と反省〕

- ・避難所運営本部の設置
- ・運営組織（役割分担）
- ・受付は大事であること
- ・地区（自治会）単位での誘導
- ・避難者の資格や特技を知る

〔被災者の視点から〕

- ・女性専用スペース
- ・幼児乳児のいる被災者への配慮
- ・高齢者への配慮
- ・子どもへの配慮
- ・掲示板の活用

振り返り

- ・ワークシートへの記入

HUG 体験の中でかंगाえたことや感じたこと、難しかったことに加え、HUG 体験の中で出てきた難しいと思われる状況にどのように対処したかなどを記入。

- ・ワークシートの発表

各グループがワークシートに記入したことを発表。この際難しかったという意見が出た際には他の班ではどのように対処したか発表してもらい、お互いに学び合うことができました。各班から中学生が発表しましたが、いずれの班もしっかりとした意見を述べてくれたことに周りの参加者も感心していました。

講評

防災士会講師，植村さんからの講評

奈良教育大学 古田准教授からの講評

あいさつ

体験会や振り返りを通して、それぞれの参加者が、「この場合どうするか」と真剣に「考

える」ことをされていました。様々な立場の方が同じグループとなって避難所運営を考えることで、色々なものの考え方の相違が見えてきて、参加者の方々が災害・減災・防災を自分自身の問題だと捉えることができていたと思います。今回のプログラムを通して考えたことを地域、学校、家族等、自らのコミュニティに持ち帰って広げ、皆で考えていくひとつの大きなきっかけになればと願っています。

得られた成果

体験会や振り返りを通して、それぞれの参加者が、活動を楽しみながらも「この場合どうするか」と真剣に悩み、考えている様子が見られました。参加者は、本学学生、地域の方、中学生、各校種の教員、保護者、防災士会の方々と、立場や年齢層も多様な方達がひとつのグループとなって避難所運営を考える時間を共有できた、学びあえたということに、まずは大きな意味があったのだと感じています。体験会のなかで印象的な出来事の一つ例に挙げます。参加者の中学生の一人が、「避難所でのこの家族の並び方、横並びじゃなくて四角にした方が家族同士お互いに話せる環境ができるんじゃないかな」と呟いている様子を見ました。その生徒は、避難所 HUG 体験のなかで、「被災者の視点」に立ち、避難生活を考えることができていたのだと思います。そして、その生徒の呟きを聞いた他の参加者らも同時に、「被災者の視点」に立つきっかけができた瞬間であったのだと思います。各グループでそのような意見交流の場面が多くみられ、避難所運営を考える時間を共有することの重要性を改めて感じた。

今回の体験会では、それぞれの参加者の方々が「被災者の視点」「運営側の視点」にそれぞれ気づき、考えるきっかけとなったのではないだろうか。特に、中学生の生徒たちの心の奥から湧き上がる熱い思いや真剣さを目の当たりにした。参加者や運営者、体験会の場にいた者それぞれが、互いに学び合う時間になったと感じました。

本プログラムの前半部分では、本学の古田先生に「奈良で起こりうる災害について」「教員と教員を目指す学生が地域住民とともに避難所運営を考えることの大切さ」といった内容で講演していただきました。古田先生の根拠をもったお話により、参加者は「避難所運営シミュレーションをしておく必要性」についてより一層の認識を持ち、その後の避難所 HUG 体験に取り組むことができたのだと思います。そこから私たちは、根拠を持った情報を人に「語る」ことが、人の「心を動かす」ことに繋がるということを学びました。

今後に向けて

ある中学生が帰り際、「避難所 HUG のセットを中学校に貸し出してもらうことはできますか？ 生徒会で毎年、防災についての取り組みをしているんです。まだまだだなんて思いました。私、頑張ります。」と話しに来てくれた。次世代を担う子どもたち。災害時には地域の中心となって避難所運営の役割を担うであろう中学生。今回のプログラムは、「地域の方々と教員、教員を目指す学生が連携して避難所運営を行うためには・・・」という点に主軸をおいて実施したが、今回の中学生の参加の様子を見ていて、今後さらに

「地域のなかで暮らす子どもたち」にも視点を広げ、『地域と共に減災教育を考える「KYOU-YOU プロジェクト」の継続を図っていきたいと考えました。

今回の体験会を通して、参加者の方々が災害・減災・防災を自分自身の問題だと捉え考えたことを地域、学校、家族等、自らのコミュニティに持ち帰って広げ、皆で考えいくひとつの大きなきっかけになればと思います。そのためには、私たち運営側の継続した仕組みづくりが今後より一層の課題となってくると考えています。また、人の「心を動かす」ための「根拠を持つ情報を語る力」も高めていきたいと思います。

次年度も地域と共に考える減災教育の一環として、「避難所運営シミュレーションゲーム」を中心とした活動を継続していきます。

.....

発行日：2017 年 3 月 29 日
発 行：国立大学法人奈良教育大学次世代教員養成センター
編 集：ESD・課題探求研究部門 学校・地域連携領域 ボランティアサポートオフィス

【問合せ】奈良教育大学ボランティアサポートオフィス
〒630－8528
奈良市高畑町
電話 0742－27－9366 FAX 0742－27－9366

.....